

## 臨床免疫学部門

### Department of Clinical Immunology

西村純二教授の就任後 2 年が経過し、当部門の研究と診療の体制はほぼ確立した。研究面では、教官として専門分野の異なる多彩な陣容を抱え、各人の専門分野の研究に加えて、リウマチ性疾患や膠原病、炎症の病因や病態の解明に取り組んでいる。研究テーマとして、自己免疫疾患や血液疾患における B 細胞と免疫グロブリン遺伝子の解析やテロメラーゼの解析、マクロファージ機能の内分泌代謝学的解析、自己免疫性内分泌疾患や内分泌腫瘍における転写調節因子の解析、自己免疫性肝疾患における自己抗原の解析などを挙げている。これらの研究を通して得られた成果を自己免疫性疾患のワクチン療法や遺伝子治療などの新しい治療法の開発に応用することを目標としており、各人の専門分野を越えた協力体制でその努力は着実に進捗しつつある。一方、臨床面ではリウマチ性疾患・膠原病、血液疾患、内分泌代謝・糖尿病、肝臓病を中心に診療を行っており、外来患者・入院患者とも従来からのリウマチ性疾患・膠原病の患者に加えて、新たな専門分野の患者が増加した。その結果、外来患者数、入院患者数とも前年度を大きく上回り、病床稼働率も大幅に向上し、生医研附属病院の活性化に大きく貢献できた。このような患者数増加の要因の一つは、教室員が積極的に地域での症例検討会や講演会に参加し、そのなかで指導的立場を確保しつつあることである。また、専門分野の拡大は内科研修医の臨床教育の面でも大きな成果を挙げた。

教室人事では、平成 11 年 4 月 1 日付で杉村隆史(助手・肝臓病学)と平松真祐(助手・糖尿病学)が着任した。また、同 5 月 16 日付で松木美香子(1 年次研修医)が九州大学医学部第三内科に転出するとともに、明石泰郎(1 年次研修医)が着任した。同 7 月 1 日より村上 司(研究生・野口病院)が研究に参加した。さらに、同 10 月 1 日付で福元 仁(1 年次研修医)が体質代謝内科よりローテートで加わり、代わりに明石泰郎が平成 12 年 2 月 1 日付で体質代謝内科へローテートした。また、同 3 月末日より本村誠一(助手・血液学)は退職し米国フロリダ大学マイアミ校へ免疫学研究のため留学した。さらに、同 4 月 1 日付で平松健司が九州大学医学部心療内科へ転出し、白土基明(助手・血液学)が着任した。

以上のように、この 1 年間で当部門の診療・研究体制は飛躍的に充実し、自己免疫疾患を中心に内科学を総合的に診療・研究する体制が整った。今後、研究所附属病院として、さらに高度な医療に対応するための準備を着々と進めている。

#### A. 自己免疫疾患および血液疾患における B 細胞と免疫グロブリン遺伝子の解析

##### a. 自己免疫疾患と悪性リンパ腫 (末広陽子, 塩川左斗志, 西村純二)

自己免疫疾患、特にシェーグレン症候群、橋本病をベースに悪性リンパ腫がしばしば発生することが知られている。その発生には B 細胞に対する何らかの慢性的抗原刺激が役割を果た

している可能性がある。その B 細胞に対する刺激がどのようなものであるかを解析することは、自己免疫疾患の病態、悪性リンパ腫の発生機序、治療を考える上で重要である。そのために、シェーグレン症候群、橋本病をベースに発症した Pseudolymphoma, lymphoma においてモノクローナルに増殖する B 細胞の表面免疫グロブリンの Fab を作成し、ランダムペプチドライブラリー, cDNA ライブラリーをスクリーニングし、結合するペプチドを解析する。

b. B 細胞系悪性腫瘍の病態解析 (塩川左斗志, 末広陽子, 西村純二)

B 細胞系悪性腫瘍は血液悪性疾患において最も頻度的には多い。しかしその病態は複雑で多様である。近年腫瘍の発生する B 細胞の分化段階をもとに B 細胞系悪性腫瘍の分類を考えることが行われるようになった。このような分類では免疫グロブリン遺伝子の構造解析が必須であり、現在主に Mantle cell lymphoma, 原発性マクログロブリン血症を中心に免疫グロブリン遺伝子の構造解析および発現解析を行っている。

c. 慢性関節リウマチ滑膜における B 細胞クローナリティーの解析 (塩川左斗志, 西村純二)

慢性関節リウマチ患者滑膜では B 細胞のオリゴクローナルな増殖が滑膜の離れた部位で共通にみられること、オリゴクローナルな B 細胞の増殖は長期に渡って安定してみられるものであることを明らかにした。今後はより詳細に滑膜における B 細胞の動態を明らかにするために、microdissection 法を用い、胚中心様の構造物、その他のリンパ球の浸潤領域別にレパートアの解析を行っていく。

d. 全身性エリテマトーデスと B 細胞 receptor editing (塩川左斗志, 西村純二)

一卵性双生児などの研究から、全身性エリテマトーデスの発症に遺伝的素因が関与することが知られている。B 細胞の自己反応性を抑制する機構として receptor editing がある。全身性エリテマトーデスの発症素因として receptor editing の異常が関与しているかどうかを、患者ゲノム上で不活化された kappa 遺伝子を解析することにより検討中である。

B. 自己免疫疾患および血液疾患におけるテロメラーゼの解析と臨床応用

a. 多発性骨髄腫に対する抗テロメラーゼ細胞療法の確立 (白土基明, 西村純二)

染色体末端のテロメアの長さの調節に中心的役割を果たすテロメラーゼの活性はほとんどの悪性腫瘍で検出されるが、正常細胞にはごく一部しか検出されないことが分かっている。われわれはこれまでに多発性骨髄腫においても検索したすべての細胞にテロメラーゼ活性が検出され、その強さは細胞増殖と密接な関連があることを明らかにしてきた。また、テロメラーゼ構成蛋白である TERT の一部はクラス I HLA によって細胞表面に表出しており、細胞療法の標的となる可能性が示唆されている。われわれは樹状細胞および細胞障害性 T リンパ球を用

いた多発性骨髄腫に対する抗テロメラーゼ療法の確立をめざす。

b. 慢性関節リウマチ滑膜 T リンパ球のテロメラーゼ活性に対する TRAIL の効果

(白土基明、塩川左斗志、生山祥一郎、西村純二)

慢性関節リウマチ滑膜の CD4 T リンパ球は強いテロメラーゼ活性を持っていることが知られているが、その意義および調節機構については未知である。近年 TNF スーパーファミリーの TRAIL がマウスのコラーゲン誘発関節炎モデルにおいて発症を抑制すること、T リンパ球の細胞周期の進展を止めることが示された。われわれは慢性関節リウマチ滑膜より純化した CD4 T リンパ球に対する TRAIL の効果をテロメラーゼ活性、細胞周期、アポトーシスより検討する。

C. マクロファージの内分泌代謝学

a. 炎症における核内受容体 PPAR の役割の解明と新しい治療法の開発

(生山祥一郎、谷口 晋、西村純二)

慢性関節リウマチの炎症の局所である関節滑膜はマクロファージ様細胞から構成され、また関節腔内には好中球やマクロファージが動員され炎症反応を惹起する。核内受容体 PPAR はマクロファージに発現し、その機能を制御することが明らかにされてきた。そこでリウマチ炎症の局所において PPAR が重要な役割を演じている可能性が推測される。本研究では PPAR のリウマチ炎症部位における病態生理学的意義を明らかにし、より有用な治療法の開発をめざす。

b. マクロファージにおける adipose differentiation-related protein の発現調節と作用の解明

(谷口 晋、生山祥一郎、西村純二)

ADRP (adipose differentiation-related protein) や perilipin は特に脂肪細胞において細胞内脂肪滴構成蛋白としての役割が報告されている。脂質を蓄積したマクロファージは泡沫細胞と呼ばれ初期動脈硬化巣の形成に重要と考えられているが、細胞内脂肪滴の構成蛋白は意外に知られていない。ADRP や perilipin はその有力な候補であるが、私達はマクロファージにおいても ADRP が発現していることを見いだした。そこでマクロファージにおける ADRP の発現に関与する因子に関して解明すると共に、分子生物学的にもプロモーター解析等を行う。

D. 転写調節因子からみた内分泌疾患の解析

a. 転写調節因子からみた自己免疫性甲状腺疾患の病因・病態の解明と新しい治療薬の探索

(生山祥一郎、西村純二)

バセドウ病などの自己免疫性甲状腺疾患の病因・病態や新しい治療薬を探索する目的で、甲

状腺細胞に発現する転写調節因子の視点から次の2点の検討を行っている。TSH 受容体遺伝子と MHC 遺伝子（とくに MHC class II）の発現調節に關する共通の転写調節因子の機能発現の機序とその発現制御機構を明らかにし、これらの転写調節因子の機能や発現に影響を与える薬物を探索する。また、MHC class II 遺伝子の発現に關する転写調節因子 CIITA について、その発現調節の機序を解析している。

b. 下垂体前葉細胞における転写調節因子とダイオキシン受容体の解析と生理的意義の解明

（生山祥一郎，谷口 晋，西村純二）

下垂体前葉を構成する5種類の細胞は共通の前駆細胞から分化してくると考えられており、その分化に關わる転写調節因子の時間的、空間的な発現調節機構とその役割が明らかにされつつある。純粋な前葉細胞を用いることのできないヒトにおいて、下垂体腺腫は腫瘍化した細胞とはいえ有用な研究材料となる。この研究では下垂体腺腫において各種の転写調節因子の発現を検討し、ヒトの前葉細胞におけるその生理的意義を明らかにする。また、内分泌かく乱化学物質の下垂体細胞への影響を検討するため、その受容体の発現について検討している。

E. 自己免疫性肝疾患に關わる自己抗原および免疫グロブリン遺伝子の解析

a. 自己免疫性肝炎におけるLKM-1抗体の検討

（杉村隆史，西村純二）

LKM-1抗体(liver kidney microsomal antibody type 1)は2型自己免疫性肝炎(AIH-2)に特徴的な自己抗体であり、一部のC型慢性肝炎患者血清中にも検出される。この抗体の認識する対応抗原は、チトクロームP-450のサブクラス2D6(CYP2D6)であることが知られている。杉村はドイツ・ハノーバー医科大学Manns教授と協同し、LKM-1抗体が立体的なepitopeを認識することを明らかにするとともに、そのconformational epitopeを形成する部位を同定した。このepitopeを用いてLKM-1抗体を高感度に定量する方法を作成し、本邦の肝疾患におけるLKM-1抗体の臨床的意義について検討予定である。

b. 原発性胆汁性肝硬変(PBC)の肝内門脈域浸潤B細胞における免疫グロブリン遺伝子の解析

（杉村隆史，塩川左斗志，西村純二）

自己免疫性肝疾患の一つであるPBCでは、特異的自己抗体である抗ミトコンドリア抗体とその対応抗原について解析が進められてきたが、実際に肝内門脈域にどのようなB細胞のクローンが存在しているかは不明である。我々はPBC患者の肝生検組織からmicrodissection法により得られた門脈域浸潤細胞のDNAを抽出し、PCR法を用いて免疫グロブリンH鎖可変領域の塩基配列を解析する事により、肝内門脈域浸潤B細胞のclonalityを検討中である。

## 業績目録

### 原著論文

1. Shiokawa S, Mortari F, Lima J, Nunez C, Bertrand FE, Kirkham PM, Zhu S, Dasanayake AP, Schroeder Jr HW. 1999.  
Both genetic and somatic mechanisms limit the expression of long immunoglobulin HCDR3 intervals during ontogeny.  
J. Immunol. 162, 6060-6070.
2. Shiokawa S, Nishimura J, Uike N, Saburi Y, Suehiro T, Yamamoto K. 1999.  
Clonal identities and multiple isotype transcripts in hematological diseases revealed by a single-strand conformation polymorphism analysis of the immunoglobulin heavy chain messenger signals.  
Am J Hematol 62: 74-81.
3. Ohe K, Ikuyama S, Takayanagi R, Kohn LD, Nawata H. 1999.  
Nicotinamide potentiates TSHR and MHC class II promoter activity in FRTL-5 cells.  
Mol Cell Endocrinol 149:141-151.
4. Hamaguchi K, Cong ND, Yanase T, Ikuyama S, Goto K, Takayanagi R, Nawata H, Kusuda Y, Fukagawa K, Sakata T. 1999.  
Novel germline mutations of the *MEN1* gene in Japanese patients with multiple endocrine neoplasia type 1.  
J Hum Genet 44:43-47.
5. Nawata H, Yanase T, Oba K, Ichino I, Saito M, Goto K, Ikuyama S, Sakai H, Takayanagi R. 1999.  
Human Ad4BP/SF-1 and its related nuclear receptor.  
J Steroid Biochem Mol Biol 69:323-328.
6. Sugimura T, Motomura S, Sakai H, Nawata H. 1999.  
Increased serum soluble IL-2 receptor levels following interferon therapy in patients with chronic hepatitis C.  
Hepato-Gastroenterol 46:1827-1830.
7. Shiratsuchi M, Muta K, Umemura T, Nishimura J, Nawata H, Kozuru M. 1999.  
Telomerase activity in myeloma cells is closely related to cell cycle status, but not to apoptotic signals induced by interferon- $\gamma$ .  
Leukemia and Lymphoma 34: 349-359.
8. Fujikawa M, Okamura K, Sato K, Mizokami T, Shiratsuchi M, Fujishima M.

1999.

Increased sensitivity to thyroid hormone replacement therapy followed by hyponatremia and eosinophilia in a patient with long-standing young-onset primary hypothyroidism.

J Endocrinol Invest 22:476-480.

9. Yoshida T, Kimura N, Sawada H, Suematsu E, Nagano M, Akiyoshi T, Motomura S, Kikuchi M, Nishimura J, Tamura K. 1999.  
CD56+ CD7+ stem cell leukemia/Lymphoma with D2-J 1 rearrangement.  
Int Medicine 38: 547-555.
10. Suehiro Y, Muta K, Umemura T, Abe Y, Nishimura J, Nawata H. 1999.  
Macrophage inflammatory protein 1 alpha enhances in a different manner adhesion of hematopoietic progenitor cells from bone marrow, cord blood, and mobilized peripheral blood.  
Exp Hematol 27: 1637-1645.
11. Shiokawa S, Miyazaki Y, Nakamura M, Nkayama T, Ohshima K, Suehiro Y, Yamamoto K, Nishimura J. 2000.  
Expansion of identical B cell clones in the bilateral parotid glands and their circulation in the peripheral blood in a patient with Sjogren's syndrome.  
Mod Rheumatol 10: 58-61.
12. Abe Y, Takatsuki H, Odada Y, Saito a, Kimura T, Nishimura J. 1999.  
Mucosa-associated lymphoid tissue type lymphoma of the gallbladder associated with acute myeloid leukemia.  
Internal Med 38: 442-444.
13. Abe Y, Hirase N, Muta K, Okada Y, Kimura T, Umemura T, Nishimura J, Nawata H. 2000.  
Adult onset of cyclic hematopoiesis in a patient with myelodysplastic syndrome.  
Int J Hematol 71: 40-45.
14. Hirase N, Yufu Y, Abe Y, Muta K, Shiokawa S, Nawata H, Nishimura J. 2000.  
Primary macroglobulinemia with t(11;18)(q21;q21).  
Cancer Genet Cytogenet 117: 113-117.
15. 生山祥一郎, 母 義明, 高柳涼一, 西村純二, 名和田 新. 1999.  
下垂体腺腫における転写因子の発現と前葉細胞の分化について  
ホルモンと臨床 47 (増刊) : 50-56.

16. 崔日承, 後藤達郎, 長野光之, 牟田耕一郎, 油布祐二, 鷓池直邦, 小鶴三男, 安部康信, 西村純二. 1999.  
AML への進展過程で t(3;21)(q26;q22)転座が出現し AML1/EVI1 キメラ mRNA が検出された MDS.  
臨床血液 40: 518-520.
17. 嶋本正弥, 安部康信, 木原 亨, 落合利彰, 柳瀬敏彦, 梅村 創, 西村純二, 牟田耕一郎, 名和田 新. 1999.  
胃癌を合併した本態性血小板血症の一例-術前血小板数コントロールにおけるヒドロキシウレアの有効性-  
臨床と研究 76: 1648-1650.
18. 西藤亮子, 南 留美, 白土基明, 安部康信, 橋本俊彦, 西村純二, 牟田耕一郎, 名和田 新. 1999.  
高ホモシスチン血症を呈し多発性の静脈血栓を認めた Evans 症候群の一例.  
臨床と研究 76: 2171-2174.
19. 鳥巢仁枝, 白土基明, 酒井好古, 竹下盛重, 安田 勝. 1999.  
Cytophagic histiocytic panniculitis.  
臨床皮膚科 53: 919-922.
20. 三浦史郎, 白土基明, 福留克行, 原田直彦, 安部康信, 牟田耕一郎, 名和田 新. 2000.  
膀胱炎及び腹膜炎を主徴とした全身性エリテマトーデスの一例.  
九州リウマチ 19:51-55.
21. 中村教泰, 宮崎吉孝, 喜多宏人, 塩川左斗志, 瀬戸口京吾, 川畑仁人, 三崎義堅, 山本一彦, 西村純二. 2000.  
下腿圧痕浮腫を伴ったリウマチ性多発筋痛症の一例.  
九州リウマチ 19:97-100.
22. 松木美香子, 本村誠一, 喜多宏人, 中村教泰, 平山健司, 末廣陽子, 谷口 晋, 塩川左斗志, 生山祥一郎, 西村純二. 2000.  
偽性腸閉塞をきたした全身性强皮症の 2 症例.  
九州リウマチ 19:78-81.

## 総 説

1. 西村純二, 牟田耕一郎. 1999.  
重大な副作用と処置. 症状各論, 再生不良性貧血, 溶血性貧血.  
医薬ジャーナル 35: 95-100.
2. 西村純二. 1999.

慢性骨髄性白血病.

Year note 2000, Selected article CD-ROM. (メディク・メディア社).

3. 西村純二. 1999.  
慢性骨髄性白血病.  
Year note 2000, インフォームド・コンセントのためのアクセスマニュアル CD-ROM.(メディク・メディア社).
4. 西村純二. 1999.  
イヤーノート・アトラス, 慢性骨髄性白血病 pp182. (メディク・メディア社)
5. 塩川左斗志. 1999.  
悪性関節リウマチ.  
Rheumatology Clinical Update 3: 25-27.
6. 名和田 新, 後藤公宣, 市野 功, 生山祥一郎, 柳瀬敏彦, 大庭功一, 下田聖子, 高柳涼一, 大江賢治, 船越顕博, 蘆田健二, 足立雅広, 井口東郎. 1999.  
臨床医学の展望: 内分泌学.  
日本醫事新報 3911:11-20.
7. 名和田 新, 後藤公宣, 高柳涼一, 柳瀬敏彦, 生山祥一郎. 1999.  
グルココルチコイド、ミネラルコルチコイドおよび DHEA 補充療法の適応と実際.  
BIO Clinica 14:1073-1076.
8. 生山祥一郎, 名和田 新. 2000.  
内分泌学的診断: 先端巨大症.  
CLINICAL NEUROSCIENCE 18: 52-55.
9. 塩川左斗志. 2000.  
難治性リウマチの概念.  
医薬ジャーナル 36: 95-98.

## 著 書

1. 生山祥一郎. 1999.  
先端巨大症.  
今日の治療指針 1999 年版 (多賀須幸男、尾形悦郎 総編集), pp.599-600, 医学書院, 東京.
2. 名和田 新, 後藤公宣, 生山祥一郎, 高柳涼一. 1999.  
2.5. 続発性骨粗鬆症 2.5.1. 薬物 (コルチコステロイド).  
最新骨粗鬆症 (折茂 肇編), pp59-62, ライフサイエンス出版, 東京.

## 研究報告書

1. 生山祥一郎, 母 義明, 高柳涼一, 野口志郎, 名和田 新. 1999.  
バセドウ病甲状腺細胞における転写因子 CIITA の発現.  
厚生省特定疾患「ホルモン受容機構異常調査研究班」平成 10 年度総括事業報告書,  
pp.56-58.

## 講 演

1. 西村純二. (1999, 6/13).  
膠原病治療の現況と将来.  
膠原病友の会大分支部講演会, 大分.
2. 西村純二. (1999, 7/29).  
ランチョンセミナー: ステロイド誘発性骨粗鬆症の予防と治療.  
第 17 回日本骨代謝学会, 大阪.
3. 西村純二. (2000, 2/5).  
自己免疫性血液疾患の診断と治療.  
第 21 回日本内科学会九州支部生涯教育講演会, 福岡.
4. 西村純二, (2000, 3/3).  
C M L は何を教えてくれたか?  
第 24 回福岡 BRM 研究会, 福岡.
5. 生山祥一郎. (1999, 11/30).  
症候から考える内分泌疾患の鑑別診断.  
東国東郡医師会勉強会, 国東町, 大分.
7. 生山祥一郎. (1999, 6/29).  
エビデンスにもとづいた高脂血症の治療.  
速見・杵築医師会講演会, 杵築市.
8. 生山祥一郎. (1999, 5/17).  
ホルモンの作用機構と「環境ホルモン」.  
昭栄化学工業(株)リサーチセミナー, 鳥栖市.

## 学会発表

1. Mu YM, Oba K, Ashida K, Ito T, Ohe K, Yanase T, Ikuyama S, Takayanagi R, Nawata H. (1999, 6/12-6/15).  
Molecular cloning and tissue expression of human pituitary tumor transforming gene (hPTTG).

- 81th Annual Meeting of The Endocrine Society, San Diego, CA, USA.
2. Oba K, Yanase T, Ichino I, Goto K, Takayanagi R, Ikuyama S, Nawata H. (1999, 6/12-6/15).  
Transcriptional regulation of human *FTZ-F1* gene that encodes adrenal 4-binding protein/steroidogenic factor 1 (Ad4BP/SF-1).  
81th Annual Meeting of The Endocrine Society, San Diego, CA, USA.
  3. Ichino I, Yanase T, Oba K, Takayanagi R, Ikuyama S, Nawata H. (1999, 6/12-6/15).  
cDNA cloning and expression of two isoforms of rat fushitarazu-factor 1 beta (FTZ-F1b).  
81th Annual Meeting of The Endocrine Society, San Diego, CA, USA.
  4. Ikuyama S, Mu YM, Takayanagi R, Nishimura J, Nawata H. (1999, 6/15-6/17).  
Cell type-specific expression of estrogen receptor (ER) subtypes in human pituitary adenomas.  
6<sup>th</sup> The International Pituitary Congress, Long Beach, CA, USA.
  5. Muta K, Choi I, Abe Y, Suematsu E, Nishimura J, Nawata H. (1999, 10/24-10/28).  
Interferon gamma enhances survival of mature erythroid progenitor cells by reducing apoptosis.  
IX Congress of the International Society of Hematology, Asian-Pacific division. Bangkok, Thailand.
  6. Choi I, Muta K, Abe Y, Nishimura J, Nawata H. (1999/12/4-12/8).  
Interferon gamma protects mature erythroid progenitor cells from apoptosis by mechanism different from erythropoietin.  
41th Annual Meeting of American Society of Hematology, New Orleans, USA.
  7. Suehiro Y, Shiokawa S, Uike N, Muta K, Nishimura J. (2000, 3/16-3/18).  
Analysis of immunoglobulin  $\mu$  and mRNA transcripts in Waldenstrom's macroglobulinemia.  
Asian Hematology Session in the 62nd Meeting of the Japanese society of Hematology, Fukuoka, Japan.
  8. 平山健司, 末廣陽子, 本村誠一, 塩川左斗志, 西村純二. (1999, 4/15).  
レチノイン酸症候群を発症した高齢者急性前骨髄球性白血病の一例.  
第 52 回大分臨床血液懇話会, 大分.
  9. 末廣陽子, 牟田耕一郎, 梅村 創, 名和田 新, 西村純二. (1999, 4/19-4/21).

- 造血前駆細胞の接着能に及ぼす MIP-1 の影響.  
第 61 回日本血液学会総会, 東京.
10. 平瀬伸尚, 原 敬一, 安部康信, 牟田耕一郎, 梅村 創, 名和田 新, 西村純二, 山本政弘.  
(1999, 4/19-4/21).  
白血病株化細胞における PPAR リガンドの効果.  
第 61 回日本血液学会総会, 東京.
11. 崔日承, 牟田耕一郎, 南 留美, 原 敬一, 安部康信, 梅村 創, 山本政弘, 名和田 新, 西村純二. (1999, 4/19-4/21).  
インターフェロン は赤芽球系コロニー前駆細胞のアポトーシスを抑制する.  
第 61 回日本血液学会総会, 東京.
12. 原 敬一, 平瀬伸尚, 安部康信, 牟田耕一郎, 南 留美, 梅村 創, 名和田 新, 山本政弘,  
西村純二. (1999, 4/19-4/21).  
骨髓間質細胞株 MS-5 の純化 BFU-E に対する促進作用.  
第 61 回日本血液学会総会, 東京.
13. 南 留美, 牟田耕一郎, 原 敬一, 安部康信, 梅村 創, 山本政弘, 名和田 新, 西村純二.  
(1999, 4/19-4/21).  
骨髓腫細胞株 PCM6 における IL6 による IFN- 感受性亢進の機序の検討.  
第 61 回日本血液学会総会, 東京.
14. 中村教泰, 喜多宏人, 本村誠一, 平山健司, 末廣陽子, 谷口 晋, 塩川左斗志, 生山祥一郎,  
西村純二. (1999, 5/8).  
原発性胆汁性肝硬変に合併した急性骨髓性白血病の一例.  
第 245 回日本内科学会九州地方会, 福岡.
15. 谷口 晋, 生山祥一郎, 高柳涼一, 西村純二, 名和田 新. (1999, 5/18).  
troglitazoneが有効であった多嚢胞性卵巣症候群 (PCO) の一例.  
第64回大分県内分泌同好会, 大分.
16. 谷口 晋, 生山祥一郎, 高柳涼一, 西村純二, 名和田 新. (1999, 5/31-6/2).  
troglitazone が有効であった多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)の一例.  
第 72 回日本内分泌学会学術総会, 横浜市.
17. 松永 静, 後藤公宣, 大庭功一, 生山祥一郎, 柳瀬敏彦, 高柳涼一, 名和田 新. (1999,  
5/31-6/2).  
小児急性リンパ性白血病に合併した重症骨粗鬆症の一例.  
第 72 回日本内分泌学会学術総会, 横浜市.
18. 下田聖子, 大庭功一, 柳瀬敏彦, 後藤公宣, 生山祥一郎, 高柳涼一, 名和田 新. (1999,  
5/31-6/2).

- 球後視神経炎を合併したリンパ球性下垂体炎の一例。  
第 72 回日本内分泌学会学術総会，横浜市。
19. 浜口和之，楠田洋一郎，深川光司，柳瀬敏彦，高柳涼一，生山祥一郎，後藤公宣，名和田新，坂田利家。(1999, 5/31-6/2).  
多発性内分泌腺腫症 1 型における MEN1 遺伝子の解析。  
第 72 回日本内分泌学会学術総会，横浜市。
20. Mu YM, Oba K, Ashida K, Ito T, Ohe K, Yanase T, Ikuyama S, Takayanagi R, Nawata H. (1999, 5/31-6/2).  
Molecular cloning and tissue expression of human pituitary tumor transforming gene (hPTTG).  
第 72 回日本内分泌学会学術総会，横浜市。
21. 塩川左斗志，中村教泰，宮崎吉孝，西村純二。(1999, 6/3-6/5).  
両耳下腺と末梢血中に同一 B 細胞クローンの存在を認めたシェーグレン症候群の一例。  
第 43 回日本リウマチ学会総会，札幌。
22. 谷口 晋，平山健司，塩川左斗志，生山祥一郎，松木美香子，中村教泰，末広陽子，本村誠一，西村純二 (1999, 6/3-6/5).  
反復性の無菌性髄膜炎を合併したシェーグレン症候群の一例。  
第 43 回日本リウマチ学会総会，札幌。
23. 平山健司，塩川左斗志，生山祥一郎，中村教泰，本村誠一，末広陽子，松木美香子，西村純二。(1999, 6/3-6/5).  
高血圧の治療にアンジオテンシン 受容体拮抗剤が有効であった強皮症腎クリーゼの一例。  
第 43 回日本リウマチ学会総会，札幌。
24. 谷口 晋，塩川左斗志，明石泰郎，平山健司，末廣陽子，本村誠一，平松真祐，杉村隆史，生山祥一郎，西村純二。(1999, 6/24).  
慢性関節リウマチ類似の末梢関節病変を呈した強直性脊椎骨関節増殖症の一例。  
第 52 回大分県リウマチ懇話会，大分。
25. 木原 亨，白土基明，安部康信，牟田耕一郎 名和田 新，西村純二。(1999, 6/25).  
auto GVHD の誘導を試みた多発性骨髄腫の一例。  
第 9 回九州造血幹細胞懇話会，福岡。
26. 白土基明，木原 亨，安部康信，牟田耕一郎，名和田 新，西村純二，平林紀男。(1999, 7/2).  
当科における肝慢性 G V H D の検討。  
第 31 回福岡 B M T 研究会，福岡。

27. 明石泰郎, 本村誠一, 杉村隆史, 末廣陽子, 塩川左斗志, 西村純二. (1999, 7/15).  
初診時より胃-結腸瘻を認めた胃原発B細胞リンパ腫の一例.  
第 53 回大分血液懇話会, 大分.
28. 平松真祐, 生山祥一郎, 本村誠一, 谷口 晋, 杉村隆史, 塩川左斗志, 西村純二. (1999, 8/21).  
偽性副甲状腺機能低下症(PHP) II 型を併発したミトコンドリア遺伝子異常を伴う糖尿病の一例.  
第 246 回日本内科学会九州地方会, 熊本.
29. 南 留美, 牟田耕一郎, 崔日承, 本村誠一, 西村純二, 名和田 新. (1999, 9/3 ).  
骨髓腫細胞株における IL6 による IFN- 感受性亢進の機序.  
第 23 回福岡 BRM 懇話会, 福岡.
30. 谷口 晋, 塩川左斗志, 明石泰郎, 平山健司, 末廣陽子, 本村誠一, 平松真祐, 杉村隆史, 生山祥一郎, 西村純二. (1999, 9/4-9/5).  
慢性関節リウマチ類似の末梢関節病変を呈した強直性脊椎骨関節増殖症の一例.  
第 18 回九州リウマチ学会, 長崎.
31. 平山健司, 谷口 晋, 塩川左斗志, 明石泰郎, 本村誠一, 平松真祐, 杉村隆史, 生山祥一郎, 西村純二. (1999, 9/16).  
クラミジア肺炎後に発症したと思われる全身性エリテマトーデスの一例.  
第 53 回大分県リウマチ懇話会, 大分.
32. 白土基明. (1999, 9/29).  
mini transplantation の理論と実際.  
第 1 回 HIT カンファレンス, 福岡.
33. 本村誠一, 末廣陽子, 西村純二, 牟田耕一郎. (1999, 10/13-10/15).  
自己免疫疾患に合併した急性骨髄性白血病の二例.  
第 41 回日本臨床血液学会総会, 秋田.
34. 木原 亨, 原 敬一, 白土基明, 安部康信, 牟田耕一郎, 名和田 新, 西村純二. (1999, 10/13-10/15).  
著明な圧迫骨折、骨粗鬆症で発見された ALL の一例.  
第 41 回日本臨床血液学会総会, 秋田.
35. 松島孝充, 白土基明, 崔日承, 木原 亨, 安部康信, 牟田耕一郎, 名和田 新, 西村純二. (1999, 10/13-10/15).  
欧米型 Hairy cell leukemia(HCL)の一例.  
第 41 回日本臨床血液学会総会, 秋田.
36. 安部康信, 白土基明, 牟田耕一郎, 名和田 新, 大島孝一, 菊池昌弘, 西村純二. (1999,

10/13-10/15).

皮下脂肪織炎で発症し、12年後にNK細胞性リンパ腫に移行した一例。

第41回日本臨床血液学会総会，秋田。

37. 明石泰郎，谷口 晋，本村誠一，平山健司，末廣陽子，平松真祐，杉村隆史，塩川左斗志，生山祥一郎，西村純二。(1999, 10/14).

先天性副腎過形成の遅発症例の一例。

第65回大分内分泌懇話会，大分。

38. 生山祥一郎，平松真祐，谷口 晋，西村純二。(1999, 10/15-10/16).

ミトコンドリア遺伝子異常を伴う糖尿病に偽性副甲状腺機能低下症(PHP)類似の臨床所見を呈した1例。

第37回日本糖尿病学会九州地方会，鹿児島。

39. 本村誠一，杉村隆史，谷口 晋，平松真祐，平山健司，末廣陽子，塩川左斗志，生山祥一郎，西村純二，吉河康二。(1999, 10/21).

自己免疫疾患に合併し，肝臓に弧在性のアスペルギルス膿瘍を形成した急性骨髄性白血病の1例。

第54回大分血液懇話会，大分。

40. 明石泰郎，本村誠一，平山健司，末廣陽子，谷口 晋，平松真祐，杉村隆史，塩川左斗志，生山祥一郎，本村廉明，千々岩芳春，西村純二。(1999, 11/14).

初診時より胃-結腸瘻を認めた胃原発B細胞リンパ腫の一例。

第247回日本内科学会九州地方会，長崎。

42. 生山祥一郎，母 義明，野口志郎，名和田 新，西村純二。(1999, 11/16-11/18).

バセドウ病甲状腺細胞における転写因子CIITAの発現。

第42回日本甲状腺学会，名古屋。

43. 明石泰郎，塩川左斗志，生山祥一郎，西村純二。(1999, 11/27).

一過性に低補体血症と抗ds-DNA抗体の出現をみたパルボウイルスB19感染症の一例。

第18回九州補体研究会，福岡。

44. 白土基明，木原 亨，安部康信，牟田耕一郎，名和田 新，本村誠一，西村純二，平林紀男。(1999, 12/16-17).

トランスアミナーゼ高値を呈した肝慢性GVHDの4例。

第22回日本造血細胞移植学会，広島。

45. 明石泰郎，谷口 晋，塩川左斗志，平松真祐，生山祥一郎，西村純二。(2000, 2/5).

稀発月経で発見された遅発型3-OH steroids dehydrogenase (3-OH-HSD)欠損症の1例。

第248回日本内科学会九州地方会，福岡。

46. 末廣陽子. (2000, 2/17).  
造血前駆細胞の接着能における MIP-1 の影響.  
第 19 回福岡造血器研究会, 福岡.
47. 末廣陽子, 牟田耕一郎, 梅村 創, 西村純二, 名和田 新. (2000, 3/3).  
造血前駆細胞の接着能における MIP-1 の影響.  
第 24 回福岡 BRM 研究会, 福岡.
48. 福元 仁, 本村誠一, 谷口 晋, 末廣陽子, 平山健司, 平松真祐, 杉村隆史, 塩川左斗志, 生山祥一郎, 西村純二. (2000, 3/4-3/6).  
免疫抑制剤による膠原病治療中に骨髄性白血病を合併した二例.  
第 19 回九州リウマチ学会, 久留米.
49. 牟田耕一郎, 西村純二. (2000, 3/16-3/18).  
シンポジウム: 赤芽球系前駆細胞のアポトーシスと疾患.  
第 62 回日本血液学会総会, 福岡.
50. 南 留美, 牟田耕一郎, 本村誠一, 安部康信, 西村純二, 名和田 新. (2000, 3/16-3/18).  
K562 における p16 の分化, アポトーシスに与える影響の検討.  
第 62 回日本血液学会総会, 福岡.
51. 白土基明, 木原 亨, 安部康信, 牟田耕一郎, 名和田 新, 西村純二. (2000, 3/16-18).  
多発性骨髄腫におけるテロメラーゼ活性の臨床的検討.  
第 62 回日本血液学会総会, 福岡.
52. 福元 仁, 本村誠一, 谷口 晋, 末廣陽子, 明石泰郎, 平山健司, 平松真祐, 杉村隆史, 塩川左斗志, 生山祥一郎, 西村純二. (2000, 3/23).  
若年性関節リウマチに合併した急性好塩基球性白血病の一例.  
第 55 回大分臨床リウマチ懇話会, 大分.
53. 松坂浩史, 板場壮一, 本村廉明, 牟田浩実, 前田豊樹, 千々岩芳春, 末廣陽子, 西村純二, 吉川康二. (2000, 3/30-31).  
放射線照射, 回盲部切除後に巨赤芽球性貧血を呈した一例.  
第 75 回消化器学会地方会, 鹿児島.